

要 約

本論文は、Brown & Levinson (1978, 1987) のフェイス侵害リスクの見積もり公式 $W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$ を枠組みとし、3つの調査で社会的距離 (D)、力関係 (P)、Rの要因群が断り行為、助言行為、迷惑行為の選択と判断に与える影響およびその影響関係の階層性について検討した。その際に、雑多な変数の集りとして扱われてきた R の要因を、R(situation)の「場面・状況」、R(embarrassment)の「相手を恥ずかしがらせる程度」、R(linguaculture)の「使用言語と文化差」、R(gender)の「性差」などの要因に分けた。3つの調査の概要は以下のとおりである。

調査1は、依頼に対する断り行為について、中国人日本語学習者（中国語での回答と日本語での回答の両方）と日本語母語話者を対象に、相手との社会的距離の D、力関係の P、R には2種類を設け、依頼場面としての R(situation)および使用言語と文化差としての R(linguaculture)の要因群が断り難さと相手への配慮に与える影響を回帰木分析で検討した。分析の結果、断り難さに対して最も強く影響したのは社会的距離の D で、次に力関係の P と場面の R(situation)であった。また、社会文化差や使用言語の違いの R(linguaculture)の要因についても検討したが、D と P よりも影響力が弱く、依頼場面によって影響の有無に多様性が見られた。以上のように、Brown & Levinson (1978, 1987) のポライトネス理論の見積もり公式は、フェイス侵害リスクを予測する影響要因を並列に並べていたが、本研究では、影響要因の強さには違いがあり、それらが階層性を持っていることを示した。

調査2は、助言行為について、中国人日本語未習者、中国人日本語学習者（中国語での回答と日本語での回答の両方）と日本語母語話者を対象に、相手との社会的距離のD、力関係のP、Rには3種類を設け、R(embarrassment)の「相手を恥ずかしがらせる程度」、R(linguaculture)の「使用言語と文化差」、R(gender)の「性差」の要因群が助言の難しさと助言行動の有無に与える影響を決定木分析で検討した。分析の結果、「助言する/しない」という行動面での選択は「助言の難しさ」についての判断を反映していることが分かり、助言が難しいという認識が強くなると、助言行動を諦める傾向が見られた。また、助言の難しさと助言行動を行うかどうかを決める要因には階層性が見られた。まず、相手を恥ずかしがらせる程度のR(embarrassment)が、助言行動の有無に最も大きな影響を与えていた。次に、社会的距離のDが強く影響した。親しい関係の相手に助言する際には、助言行動を気軽に行うことができるが、疎遠な関係の相手では助言行動を行うのは難しい。これらの2つの影響要因の次に、P、R(linguaculture)、R(gender)が複雑に影響した。これまであまり重視されることのなかったRの影響が強いことを示した。

調査3は、迷惑行為について、社会的距離のDを疎遠、力関係のPを同等に固定し、Rのみに焦点を当て、Rを迷惑場面の内容のR(situation)、文化差と使用言語のR(linguaculture)の2つに分け、迷惑に対する注意の有無を加え、3つの要因群が社会的な迷惑場面における迷惑度の認知への影響を回帰木分析で検討した。調査の結果、迷惑行為の迷惑度認知に関して、まず迷惑場面の内容のR(situation)が強く影響した。場面により、注意する人と注意しない人に分けられ、文化差や使用

言語の R(linguaculture)の影響は、樹形図では最後の階層となった。つまり、文化差や使用言語が影響しているものの、弱い影響要因であった。Rの要因であっても、影響の強さに大きな違いがあることを示した。また、調査結果から、日本人は迷惑行為に対し、注意行動をとるかどうかに関わらず、感じる迷惑度が高いのに対して、中国人は感じる迷惑度は比較的低いことが分かった。さらに、中国人はそれほど迷惑と感じなくても、注意行動をとる傾向が見られた。

上記の3つの調査の結果から、本論文の意義は以下の3点に集約される。

第1に、Brown & Levinson (1978, 1987) のポライトネス理論の普遍性を実証的な手法で示した点である。Brown & Levinson のポライトネス理論は、フェイス侵害リスクの見積もり公式であり、 $W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$ で示される。相手との社会的距離が D、力関係が P で、これらは明瞭な定義がされている。一方、R は、男女差、文化差など残されたものをすべて含んでいる。ところが、比較文化的な語用論の研究（例えば、井出, 2006）では、日本の文化的な特殊性を挙げ、Brown & Levinson の理論はアジア文化には適用できないと批判している。本論文は実証的な手法により、Brown & Levinson のポライトネス理論を支持し、この理論がアジア圏に所属する日本と中国にも適用できる普遍性のある理論であることを支持するデータを提供した。

第2に、Brown & Levinson の理論で挙げた諸要因には階層性があることを示した点である。Brown & Levinson のポライトネス理論の見積もり公式では、フェイス侵害リスクを予測する影響要因を、D、P、R と、重回帰式のように並列に並べてい

た。しかし、本研究では、ポライトネス理論の影響要因の強さには違いがあり、それらが階層性を持っていることを、最新の統計手法である決定木分析（decision tree analysis）で示した。

第3に、Brown & Levinson の理論の R 要因の内容および R の影響力を説明した点である。Brown & Levinson の理論的な枠組みがかなり普遍的に適用できることはもちろんであるが、文化社会的な側面からは、これまで R は影響の弱い要因であるとされてきた。しかし、本論文では、R の場面や状況がポライトネスに強く影響することが観察され、これを R(situation)の変数で示した。さらに、「助言で相手を恥ずかしがらせる程度」の負荷も R の一種と考えて、R(embarrassment)も強い要因であることを指摘した。以上のように、これまで D と P が普遍的で強い影響要因であることを示した研究が多数見られたが、本論文では、Brown & Levinson の理論では雑多な変数の集りとして扱われてきた R の中でも、R(situation)の「状況・場面」、R(embarrassment)の「相手を恥ずかしがらせる程度」のようにポライトネスに強く影響する諸要因が含まれていることを示した。